

# 「獵人日記」論

## —その方法の考察—

齊藤陽一

私の前にツルゲーネフは、常に二つの姿を持って立ち現われてくる。一つは思想家としての彼、19世紀ロシア社会の問題に積極的に関わり、インテリゲンツィアの精神史を描き続けた彼、常に何かを語ろうとした彼である。もう一つは芸術家としての彼、つまりどのように語るかを考え続けた彼である。

エイヘンバウムはツルゲーネフの小説について次のように言っている。

「ツルゲーネフに特徴的なることであるが、彼はいつでも物語ろうとし、いつでも聴き手の方を向いている。…（中略）…彼の中篇小説はしばしば外形上も、実際に直接耳で聴く口頭の物語というイリュージョンの上に構成されている（9-p 239-以下引用は参考文献目録の番号とそのページ数で示す。）。

では、ツルゲーネフは語りの手法で何を語ろうとしたのか、そしてどのように語ろうとしたのか。或いはそれは同義語かもしれないのだが……。

ここでは「獵人日記」を上のような問題意識をもって分析してみるつもりだが、この作品を取り上げるのは次の理由による。すなわち、農奴制を廃止に追い込むきっかけになったという面が強調されすぎて方法へのアプローチがかすみがちであること、初期の作品であるためか、様々な方法が混在していて、後の作品を見る上で都合がよいということである。

勿論ページ数の関係で全作品を分析するわけにはいかない。そこで、「ホーリとカリースイチ」「事務所」「シチグロフ郡のハムレット」の3篇を中心に分析してみたい。この3篇を選んだのは叙述の方法の違いからで、具体的に言うならば、「ホーリとカリースイチ」は作者が百姓の中にはいっていき、その中で彼らと行動をともにするという構成、「事務所」は作者が百姓の中にはいっていき、彼らの生活を観察するという構成、「シチグロフ郡のハムレット」は偶然知り合った人物からの聞き書きという構成をとっているという相異である。（注1）

「獵人日記」の冒頭を飾る「ホーリとカリースイチ」はツルゲーネフを本格的な文学活動へと導いた作品である。プスタヴォイトはこのころのツルゲーネフについて次のように述べている。

「彼は、まもなく文学活動を全く捨ててしまおうと思っていたので、自分の天職について真剣に感じてはいなかった。」（3-p 25）

そうした状態だったので彼はパナーエフからの要請を受けて「同時代人」第一号の雑誌欄に「ホーリとカリースイチ」を載せるとパリに出発してしまった。ところがこの作品は思わぬ反響を呼び、ベリンスキーをして有名な「彼以前に誰一人として近づいたことのない局面から人民の方へ歩みよっている。」ということばをはかせたのであった。ここでは、ツルゲーネフが一体どのように「人民に歩みよっているのかを中心を見てみたいと思う。

「ホーリとカリースイチ」はオリヨール県とカルーガ県の対照から始まる。続いてホーリとカリースイチの主人のポルトウイキン氏の登場となり（勿論獵の途中で出会う），作者は彼にホーリの所へ連れていかれる。その日はホーリ自身には会うことができず、ポルトウイキン氏からホーリが頭のいい百姓であること、年貢を納める代りに主人のために働かなくてもよいようにしてくれという希望を彼の父の所へもってきて、その希望がかなえられたことなどを聞かされる。翌日は二人で狩に出るのだが、ポルトウイキン氏はその時にカリースイチをつれていく。作者はカ

リースイチがすっかり気に入り、その夜はポルトゥイキン氏とカリースイチのことを話題にする。

3日目になるとポルトゥイキン氏は用事で町へ出かけなくてはならなくなり、作者一人でホーリを尋ねていく。今度はホーリに会うことができ、彼との間に会話が成立する。

「私たちは播種のこと、収穫のこと、百姓の生活状態のことについて話し合った……彼は私の意見にいつでも同意しているかのようだった。が、ただあとになって私は恥ずかしくなった。そして私は自分が見当違いのことを話していたような気がした。つまり話が何故か奇妙な具合になつてゐたのである。」（1-c. 121）

さて、その奇妙な具合になつてゐた話はその後どう変わっていくだろうか。作者は、「もししさしつかえなかつたら、お前の所の干し草小屋にでも泊まりたいのだが」（1-c. 12）と言ってその夜はホーリの家の納屋に泊まる。彼は書く。

「私が一晩彼と一つ屋根に暮したからか、或いは他の理由からか、ホーリは昨日よりもっとずっと愛想よく私を扱つた。」（1-c. 13）そして、その日には「祖国雑記」から農民を理想化していると批判されたカリースイチが野苺をもつてホーリの所にやってくるという場面が描かれている。

そのあとの3日間、作者はホーリの所で過ごすことになる。作者は書いている。「何によって私が彼らの信頼に値したのかはわからないが、彼らは私と打ち解けて話をした。私は喜びをもつて彼らの話を聞き彼らを観察した。」（1-c. 14）

3日の間作者は、「彼から多くを学んだ。」（1-c. 15）一方、ホーリの方は、作者が外国へ行ったことがあるのを知ると、外国のことについて色々と質問する。その様子を作者は次のように書いている。

「……ホーリは時々次のように口をはさんだ。『それはわしらの所じゃうまくいかねえだらう、が、こっちのそれはうまくいく、——それはきちんとしている。』私は、彼の質問をすべて読者にお伝えすることはできないし、またその必要もない。しかし、私は私たちの会話から一つの確信をひき出した。それは多分、読者が決して予期していない確信なのだが、ピョートル大帝はすぐれてロシア人であり、彼の改革においてまさにロシア人である、ということなのである。」

（1-c. 16）

そして、4日目の夕方、ポルトゥイキン氏のむかえが来て作者はホーリの家をあとにする。

さて、私がここで注目したいのは、この作品に述べられている思想、及びその叙述の方法である。叙述の方法のうち特に重要なのは二つのことである。その一つは、百姓であるホーリと地主である作者との間に会話が成立するのかということについて、作者がくどいくらいに注意を向けているということである。最初の日には、ホーリとの会話は「奇妙な具合になり」、一晩一緒にいるとホーリは「愛想よく作者を扱い」、3日間一緒にいるうちにやっとホーリたちは作者と「打ち解けて話をする」ようになるのである（注2）。もう一つは、ホーリとの会話から得る確信の唐突さである。作者は彼との会話を詳しく書き記すことなく、「その必要もない。」とわざわざ断わった上で「ピョートル大帝はロシア人である」といった確信を導き出している。

コヴァリヨーフは、「ホーリとカリースイチ」の掲載された「同時代人」の同じ号に載ったカヴェーリンの論文「古代ロシアの法律慣習概観」（注3）をひきながら、当時の西欧派の見解をスラヴ派と比較して次の二つの点にまとめている。すなわち人格の尊重、徳性の尊重がないのがロシアの立ち遅れる原因となったということ（注4），及びピョートル大帝の改革は決してロシアの国民性を破壊しなかったということである。ツルゲーネフは当時ベリンスキーと親しく、当

然西欧派に属していたのであるが、コヴァリヨーフは、この論文をツルゲーネフがベリンスキーから貰って読んだであろうということを推論した上で、「ホーリとカリースイチ」をスラヴ派のロシア民衆觀に対するツルゲーネフ自らの民衆觀の対置だとしている。そして彼は述べている。

「ホーリとカリースイチは全く宗教に対して無関心である。ロシアの民衆の本質は宗教への帰依にあるのではなく、あらわれてきた自分の徳性への感覚の覚醒にあるのである。」（4-c. 13）

こうしたことを考慮するとツルゲーネフの方法の意味がよりはっきりしてくる。百姓の人格の尊重というイデエ（「百姓も人間である。」）のためにツルゲーネフは非常に慎重にホーリに近づいた上で、彼が個性を發揮できる舞台を作り、彼の人間性を描き出している。また、ホーリとの会話のあとでのピョートル大帝についての確信も当時の西欧派とスラヴ派との論争を考慮した時、初めてその唐突さ、つまりツルゲーネフの思い入れが理解できるのである。

ツルゲーネフはしばしば実在の人物から出発して作品を生み出すが、このホーリも実在の人物である。では、ホーリの存在への共感だけがこの作品を書かせたのだろうか。いや、イデエが、反農奴制的な気分が先にあったと言うべきだろう。そして実在の人物、風景をモデルに作品の舞台をしっかりと構築した上で、その上に自分のイデエを盛り込んでいるのである。

「事務所」はさらに反農奴制的色彩の濃い作品である。それだけにベリンスキーもこの作品を『猶人日記』の中のすぐれた作品の一つと見なして高く評価したのであった（ツルゲーネフ全集第3巻の注による）。

この作品は、雨にあって雨宿りに立ち寄った仮小屋での老人との会話を導入部に、そのあと地主の事務所に行ってそこで起こったことを書き記すという構成になっている。その事務所での場面は丁度二つに分けられるが、前半は当直との会話であり、その中で商人の所の事務員と、地主の所の事務員との比較がなされている。そして、話が次第に主人の批判めいたものに進み、ついにその当直は隣の事務室に呼ばれてしまう。後半は、作者の特別な仕かけによって恐らくふだんの事務所内でのできごとに似たことが、地主の存在に関係なくありのままに展開することになる。その仕かけとは、仕切りをへだてただけの事務室の隣の部屋で作者が眠るというものである。

当直がでていったあと、作者は書いている。

「私は2時間ぐらい眠っていた。目を覚まし、私は起きあがろうとしたが、けだるさに負けた。私は目を閉じたが、もう眠れなかった。」（1-c. 144）

そして、事務主任と商人との会話が聞えてくる。やがて作者は「静かに身を起こし、仕切りの裂目を通して見る。」（1-c. 145）

そのうちに商人が、「お客様がどうも目をおさましになったようですよ。」と言い、事務主任がドアに寄って、「いや、眠っています。」と確認してから、賄賂の相談を始める（1-c. 145）。それが済むと当直の案内でシードルがやってくる。事務主任は、当直に作者を見に行かせる。

「当直が用心深く私のいる部屋へはいってきた。私は枕の代用をしていた獲物袋の上に頭をおいて目を閉じた。『眠っています。』と事務所に戻って当直はささやいた。」（1-c. 147）

そして、このあとでシードルの賃金の要求の場面や、クープリヤのことが続き、最後のパーザーヴェル・アンドレイチと事務主任との対決となる。

このようにこの作品では、猶人である作者が事件に全く関係のない第三者となり、全能の観察

者、語り手の役を果している。こうした方法を利用した作品は他にも見られる。

例えば、「エルモライと粉屋の女房」では作者の眠っている間にエルモライとアリーナの話が始まっている。「ページン・ルーク」でも「眠ったふりをする」（1-c.92）作者の前で少年たちの生々とした会話が展開する。「あいびき」では、眠りからさめたばかりの作者の前にアクリーナが現われる。（不思議なことには、地主を前にした時には作者は絶対に眠らない。）

「レベジャン」の中で作者は、「狩猟の主要な利益のひとつは、読者諸君、あなた方をたえずあちらこちらと行かせることで、これはひま人にはとても楽しいことである。」（1-c.172）と書いているが、それとともに居眠りを生むような肉体的疲労をあげてもよい程である。そして、実際「エルモライと粉屋の女房」の中でエルモライが眠っている（実は眠っているふりをしている）自分の主人について「走り疲れてひどく眠っている。」（1-c.25）と言っている。

こうしたことは百姓たちの生活を他人のことばを通すことなく生々と描くためには実に適切な方法であるといえよう。

ドストエフスキイ全集第4巻、「死の家の記録」の注には1850年代、60年代のオーチェルクについて次のように書いてある。

「それ（芸術的な虚構と自伝的なこと、オーチェルクの結合）は次のようなものごと、現象（ふつう作家自身によって直接に体験された）について読者に話す必要が生まれた結果であった。つまり、社会的な内容の豊富さをもち、焦眉の問題であると同時にその本性によって芸術家にふつうの筋と人物をもったロマンのフォルムとは異なった芸術的方法を用いるよう要求する現象について。」（2-c.290～291）

そのあとに続けて「死の家の記録」のオーチェルクのフォルムの特色として、事件の発展が欠けているという非難を免れ得ること、それぞれの章が論理的に完成していること、一つの章が更に新しい章のための問題を提出していること、全体の統一は、外的な事実より作者の事件を理解する心理によって保たれていることが指摘されている。

これらは40年代のツルゲーネフの「猶人日記」についても指摘し得ることである。

ロシアでも当時出版されていた「両世界評論」を通じて、農民小説についての関心は高まっていた（これについては参考文献5を参照）。また、インテリゲンツィアの間に農奴制をめぐる議論が盛んになっていた。こうした状況の下でツルゲーネフは、ロシアの百姓を描くことに取りかかった。反農奴制的な気分で。

だが、彼の用いた方法を考えてみよう。彼は百姓に近付きはしたが、決して交わりはしなかった。観察者にとどまったくとどまらざるを得なかった。それは、彼と百姓たちの距離を決定的に証明している。そして、それは「シチグロフ郡のハムレット」に用いられている方法に目を向ける時、より明らかになるのである。

「シチグロフ郡のハムレット」は後のツルゲーネフの「余計者」を扱った長編の先駆をなす作品である。この作品は、アレクサンドル・ミハイロイチの所での晩餐の場面と同じ日の夜の作者とシチグロフ郡のハムレットと自称する男（以下、ハムレットと略す）との会話の場面の二つに分けられる。全集の注によれば、この作品は初めの段階では晩餐の場面しかなく、題名も「晩餐」（Обед）となっていたのであるが、実際にテキストを読んでみると、後半の部分の方がページ数も多く、何より作者の筆が生々と動いているのが感じられる。勿論その印象は、後半ではハムレット一人に読者の目が向けられるのに対して、前半では作者がスケッチ風に書いている様々

な登場人物に読者の目が分散してしまうことから来るのだろうが。そしてその前半は、地主の生活の卑俗さを描いているとみてまず間違いないであろうが、後半は色々と解釈できる。

ツルゲーネフの一連の余計者像を肯定的ヒーローの探求と捉えるピスタヴォイトは、次のように述べている。

「この主人公（ハムレット）に対するツルゲーネフの態度の中に40年代の貴族インテリゲンツィアの実行力のなさ、生活への適応力のなさ、ヘーゲルの抽象的な哲学にまどわされていることへの作家の非難が明らかに現われている。」（3-c.44）

また、「猶人日記」の諸短篇を当時の文学界における論争との関係で考察しているコヴァリヨーフは次のように述べている。

「この作家（ツルゲーネフ）は、自身のオーチェルク（「シチグロフ郡のハムレット」）で過去と論争しているのではなく、現在と論争しているのである。そして、このオーチェルクは1846、1847年に起こった西欧派内の分化、図式的に言うならモスクワ派と『同時代人』に拠るペテルブルグ派との分化という光の中でこそ理解できるのである。」（4-c.50）

そして、彼はこの論拠としていつまでもドイツに傾倒しているモスクワ派をベリンスキイを中心としたペテルブルグ派が批判した事実をあげている。

実際にテキストに接してみると、モスクワの「サークル」ということばがハムレットから多く出てくることから考えて、コヴァリヨーフの意見に賛成せざるを得まい。ただ、西欧の思想をロシアの現実にうまく適用することができないで無為に陥っているインテリゲンツィアについての言及は、二者に共通している。

実際のテキストにも次のようなハムレットのことばが見られる。

「おっしゃって下さい。このエンツィクロペディア（ヘーゲルの）とロシアの生活との間にある共通のものとは何でしょう。そしてどうやって私たちの生活にそれを応用すべきなのかおっしゃって下さい。それもエンツィクロペディアだけでなく、一般にドイツの哲学を……もっと言ってしまうなら——科学を。」（1-c.260）

ところで、このハムレットとツルゲーネフ自身については多くの共通点が指摘できる。モスクワの大学のこと、ベルリンへの留学、ヘーゲル哲学やゲーテについての言及などである。勿論ある意味ではツルゲーネフ自身がモデルであろうが、40年代のインテリゲンツィアの典型を描くための素材として自分の体験を使っているのである。ただここで注目しなければいけないことは、この作品のように自分と同じ地主階級の人間を描く時には、ツルゲーネフはその人物に直接語らせているということである。しかも多くは相手の方から積極的に。

ハムレットは言う。

「従って、私はあなたの同類なのです……（中略）……私も内省に苦しめられているのです……（後略）」（1-c.257）

こうして同類であることを確認させておいた上で、次のように言わせている。

「どうして私があなたと、私にとって全く見知らぬ人であるあなたと、こんなにも思いがけず話しこんできましたのか——それは神のみぞ知るですよ！」（1-c.258）

そして、ご丁寧にハムレットが相手（つまり作者）に眠りたいのではないかと気をつかう場面を二度も挿入している。勿論それで話が終わるわけではなく、最後まで続くのであるが。

こうした方法は百姓以外の人間が主人公である場合に多くとられている。例えば「郡の医者」の場合、作者を診察しに来た医者が話し出す前に作者の次のような前置きがある。

世の中には奇妙なことがある。ある人とはもう長く一緒に暮し、仲よくしているのに、一度も卒直に心から話し合ったことがない。ところが別のある人とは、知り合ったばかりなのに——ほらもうあなたから彼の方へ、或いは彼からあなたの方へ、まるで懺悔の時みたいにすべての秘密までしゃべってしまうことがある。どうして私が新しい知合いの信頼を得たのか知らないが、彼はなんというわけもなく、いわゆる『突然に』私に充分注目すべき事を語ったのである。」(1-c.41)

「ピヨートル・ペトローヴィチ・カラターエフ」では、カラターエフと作者の会話が始まる前に次のような記述がある。

「私たちは熱心に話し始めた。彼が到着してから30分もたたないうちに、もう彼は、非常に人のよい卒直さで自分の身の上を私に物語っていた。」(1-c. 227)

さらに百姓の娘マトリョーナの話にはいる前にはカラターエフわざわざ断わらせている。

「あなたにお話ししてもよいのですが、あなたに御迷惑おかけするのは恥ずかしいですしつ……」(1-c. 230)

同じ地主階級を扱っている作品でも「チャルトプハーノフとネドピュースキン」(ただしこの二人を地主と呼べるのは文字通り土地をもっているという意味においてだけだが)は別の方法で書かれている。つまり、作者と主人公との邂逅の後に主人公の歴史を物語っている。これはすでに後の長篇の方法が姿を現わしていると考えてもよかろう。

いずれにせよ、「獵人日記」の百姓以外の人物を主人公とした諸篇では、その人物が自由に物語れる情況をツルゲーネフが作り出していることがわかる。その主人公たちが語るのは西欧のものをうまく適用できずに無力感に陥っている自分たちのことである。

ところでエイヘンバウムの指摘のように語りを目指したツルゲーネフである。恐らく実際の朗読の時には自分が登場人物であるかのように生々と語ったに違いない。

ツルゲーネフ自身も西欧を常に意識していた作家であった。「ホーリとカリーヌイチ」では、ホーリをゲーテに、カリーヌイチをシラーにたとえて文学仲間からやめるようにとまで言われた彼である。ロシアの百姓を描こうとしたがその底には常に西欧からのイデエ(「百姓にも人格がある」)があったのである。そして、そのイデエとロシアの現実とのくい違いが彼を苦しめた。彼の余計者を扱った作品は、彼が百姓を描こうとしたまさにその創作活動から生まれてきたと言えるのではないだろうか。

以上考察してきたことをまとめてみよう。「獵人日記」の中には百姓を主人公にした作品と貴族を主人公にした作品がある。前者はツルゲーネフにある「農奴制は廃止すべきである。」というイデエの活躍する場としての役割がある。しかし、その中で作者は百姓たちと決して真なる交わりは結んでいない。一方後者では、作者と主人公の立場は非常に近い。西欧からのイデエをロシアの現実に適用することはツルゲーネフにもやはりむずかしく、百姓を主人公とする小説を書いたあとでどこかに空虚感をもち、そうした貴族を主人公とした作品を書かざるを得なくなつていったのではないだろうか。

そして、この作品以後、彼の主要な作品は専ら貴族を扱うようになる。つまり、手法の面でも題材の面でも「獵人日記」は後のツルゲーネフの名作の習作——と呼ぶには充実し過ぎているが——と言えるのである。

注1 佐藤清郎は「獵人日記」を内容的に次の四つに分類している。（6-p 45）

- (1) スケッチ風のもの（観察記録）－10篇
- (2) 物語風のもの（恋愛－2篇、人間的感動－5篇）
- (3) 自然観察－2篇
- (4) 農奴制度批判－6篇

尚、私が取り上げた3篇はそれぞれ(1), (4), (2)に属している。

注2 こうした注意深さの必要性を「二人の地主」の次のような部分が証明している。すなわち主人に体罰を受けたヴァーシャが、「私たちの旦那は……あんな旦那は県中探しても見つかりません。」といって主人をかばうのに対して、「これなんだ、これが古いルーシなのだ。」と作者が思う部分である。（1-c. 171）

百姓はなかなか地主たちに自分の本当の考え方を打ち明けたりはしないのである。

注3 原題 Взгляд на юридический быт древней России

注4 ドストエフスキイの「貧しき人々」もこうした観点から評価されていた。バフチンは次のように書いている。

「主人公の自己意識を社会的性格の面で解釈し、そのなかでのみ主人公の新しい特徴を見る。例えば、ジェーヴシキンやゴリャートキンのなかにゴーゴリの主人公プラス自己意識を見るというのは間違っている。実はベリンスキイはこういう受け取り方をしているのだ。彼は鏡とちぎれたボタンの個所に感動して、それを引用しているが、その創作形式の意味を捉えてはいない、というのも彼にとって自己意識は『貧しい人間』のヒューマンな形象を豊かにするものにはかならぬもので、従来の作者の視野のなかで組み立てられた堅固な主人公像の特徴と同列に置いたからである。それがおそらくベリンスキイに『分身』を正当に評価させなかったのである。」（10-p 75）

一方ツルゲーネフはベリンスキイの考え方を受け入れていた。そこにツルゲーネフとドストエフスキイを隔てるものがある。

## 参考文献

- (1) И.С. Тургенев, Полное собрание сочинений и писем в 30 томах том 3, Издат. Наука, 1979.
- (2) Ф.М. Достоевский, Полное собрание сочинений в 30 томах том 4, Издат. Наука, 1972.
- (3) П.Г. Пустовойт, Иван Сергеевич Тургенев, Издат. Московского Университета, 1957.
- (4) В.А. Ковалев, "Записки Охотника" И.С. Тургенев, Издат. Наука, 1980.
- (5) Henri Granjard, Ivan Tourguénev et les courants politiques et sociaux de son temps, Institut d'études slaves de l'Université de Paris, 1966.

- (6) 佐藤清郎 「ツルゲーネフの生涯」 筑摩書房 1977年
- (7) 小椋公人 「ツルゲーネフ 生涯と作品」 法政大学出版局 1980年
- (8) 江竜龍太郎 「ツルゲーネフ研究」 理想社 1968年
- (9) ポリス・エイヘンバウム 八景秀一訳 「語りのイリュージョン」「ロシア・フォルマリズム論集」 現代思潮社 1971年より
- (10) ミハイル・バフチン 新谷敬三郎訳 「ドストエフスキイ論—創作方法の諸問題—」 冬樹社 1979年